

平成 27 年 新年賀詞交換会での市長のあいさつ（1月5日）

皆様、明けましておめでとうございます。

今年も、かくも盛大に新年賀詞交換会を開催することができました。心から御礼を申し上げます。

今年には地方創生元年の年にあたります。政府も税制、予算と、本腰を入れて地方の活力の維持、人口減少問題に正面から取り組む決意を示しています。地方創生の成功のカギは、それぞれの地域が自らの宝物を、長岡なら長岡の地域資源を活かし、長岡ならではの地方創生政策を立案することであり、それを国に示すという、今までとは流れが逆になるわけです。

しかも、20年30年の未来を見据えて、次の世代を担う若者の明るい未来を与えていくという強い目的が込められています。

この理念は、長岡の米百俵の精神に通じるのではないかと思います。小林虎三郎は、どんな若者を育てようと思ったのでしょうか。決して、エリートだけに目を向けたのではなく、農業や家業にいそしみながら一隅を照らす若者にも深い愛情を注いだのではないのでしょうか。何よりもふるさと長岡を愛して、焦土の中から長岡を発展させるぞという強い志を持った若者を育てようとしたのだと思います。

地方創生は、長岡の将来を担う若者に目を向け、長岡の良いところ、言い換えれば宝物を生かしつつ、働く場を作り、意欲のある若者を育て、そして子育て環境を整えていくことです。

私ごとになりますが、高校を卒業して大学で東京にまいりましたときに、全国から集まった同級生が長岡のことをほとんど知らないということに本当にかっかりしました。中には、「花火が有名ですね」「山本五十六の出身地ですね」とか、「米百俵を知っています」とか、ごく少数ではありますがそう言うくれる同級生がいました。それだけで元気になるんです。長岡を知り、長岡の良さをわかる人が周りに少しでもいることで、「がんばろう」という意欲が湧いてきます。

ホノルルで打ち上げる花火には、さまざまな意味が込められています。共に痛みを分かち合う、平和をアピールすることも大切ですが、最も大切なことは、長岡で生まれ育った若者が世界のどこに行っても「あの真珠湾の花火を上げた長岡から来ました」と自分の故郷を自慢できること。それを誇りに思っ自信を持つこと、それが大きな力になるのではないかと確信しています。

長岡の発展の原動力は、いうまでもなく「人」であります。特に、次の世代を担う若者が誇りと自信を持つまちにすることこそ、長岡市ならではの地方創生ではないのでしょうか。

一方、昨年の復興 10 年の実績を土台に、さらにその先の未来を見据え、長岡市の復興の姿が東日本大震災の被災地の希望の光となるよう、これからも復興支援に全力を尽くそうではありませんか。

また、市町村合併から 10 年の節目を迎えます。長岡の合併は各地域が全て同じに色に染まるのではなく、それぞれの地域が地域らしさを失わず、個性を磨きながら調和していく合併を目指してきました。これは、先ほど申し上げました、地方創生の理念に通じるものです。

競争しながらも調和する合併、競争する“競”と調和する“調”と書いて“競調”という言葉は私は考えましたが、そうした合併をさらに前に向かって進めようではありませんか。

長岡市は、財政再建を強力に進めた結果、全国 40 の特例市の中でもトップ 5 に入る貴金残高、いわゆる貯金を持っています。関東、近畿、東海のベルト地帯の裕福な都市に匹敵する基金です。これを地方創生元年の今年こそ有効に使う、全額使い切る覚悟で望みたいと考えています。

地方創生へ山積する課題に対処するためには、本日お集まりの皆様の連携、産・学・官の連携、協力が不可欠であります。本日ここにいらっしゃる皆様は、先人の志を受け継ぎ、しっかりと今日の繁栄をそれぞれの立ち場で築いてこられた方々だと思います。その先人から受け継いだ志を次の世代の若者に受け継いでいこうではありませんか。

皆様とともに、「たくましく前へ」前進することを新たにお誓い申し上げます。私のごあいさつとさせていただきます。どうもありがとうございました。